

『色葉字平他』類の韻書における漢字音

—大東急記念文庫本・龍門文庫本を例に—

大 島 英 之

1 はじめに

漢字の平仄を求めるために作成された和製韻書の一群に、中世後期に出現する、「色葉字平他」類の韻書¹がある。その内容は、前代の『平他字類抄』を改変したものが中核をなしているが、意義分類を廃して、その漢字の代表的な和訓をイロハ順で排列するという検索方法が採用されており、いっそう通俗的な性格を有すると考えられている。

これらの韻書群では、各漢字に対し、原則として、和訓と共に字音が併記されている。その多くは一音のみであり、また呉音・漢音双方の音形が確認される。これらの漢字音の性格については、従来あまり考究されてこなかったものと思われる。

中世後期には、漢籍の学習に用いられる字音について、一方では、桂庵玄樹のように世俗に流通している漢字音を用いるべきだと唱える学者が現れ、また一方では、そのような漢字音から伝統的な読書音を守るために「不濁点」が案出されるといった動きが見られる²。その背景には、漢語の増加に伴う形で、ある程度の量の漢字音——その中に占める呉音系字音は比重は高かったと考えられる——が、社会一般にも広まっていたことが想定される。稿者は、そのような当時の流通漢字音が、これらの韻書群に見える付音例に、どの程度反映されているのかという点に関心を抱いている。

本稿は、その本格的な分析の準備として、大東急記念文庫蔵本（以下「大東急本」、また「大」と略記することもある）と、龍門文庫蔵本（以下「龍門本」、また「龍」と略記することもある）を取り上げ、そこに用いられている漢字音の概要について報告するものである。

¹ 「色葉字平他」類の韻書という呼称は木村（2002）に拠る。具体的な使用場面として、和漢・漢和聯句のような「韻事」の際に、韻を求めるために用いられたという点を重視すれば、これらを「韻書」と呼んでも当を失するものではないだろう。しかし、検索方法は漢字音の「韻」ではなく日本語の「イロハ」に拠っており、また「韻」のうちの「平仄」しか求め得ないという点で、『聚分韻略』などとは性格を大きく異にする。その意味では「イロハ引き平仄字書」のような呼称の方が適切と思われるが、本稿では慣例に従う。

² この詳細については、こまつ（1970）や松井（1971）pp.5-8を参照されたい。

2 『色葉字平它』類の韻書の概要

2.1 諸本について

「色葉字平他」類の韻書としては、次の六本が知られている。先後関係は明確でないため、木村（2002）に従い、収録字数³の少ないものから多いものへと並べる。

①無窮会蔵『色葉集』

天正十六年（1588年）の書写奥書を有する。3339字。

『古辞書研究資料叢刊 第3巻』（大空社，1995）に翻刻・索引がある。

②大東急記念文庫蔵『伊呂波字平它』

明応十年（1501年）の書写奥書を有する。稿者の計上に拠れば3550字。

『大東急記念文庫善本叢刊中古中世篇14 願文・伝記・語学等』（汲古書院，2016）に影印が収録されている。

③龍門文庫蔵『色葉字平它』

室町末期の書写とされている。4020字。

『龍門文庫善本叢書 第三巻』（勉誠社，1985）に影印が収録されている。また『古辞書研究資料叢刊 第3巻』に翻刻・索引がある。

④祐徳稲荷神社蔵『伊露葩字』

室町末期の書写とされている。5272字。

原本画像は、国文学研究資料館の日本古典籍総合データベースで確認することができる。また、『古辞書研究資料叢刊 第3巻』に翻刻・索引がある。

⑤『色葉文字』

岡田（1938）によって紹介されたが、所蔵に関する具体的な記述は無く、現存状況は不明である。岡田（1938）の報告に拠ると収録字数は5995字。

⑥『新韻集』

阿波国文庫旧蔵、戦災により焼失。東京大学国語研究室などに江戸時代の転写本がある。万里集九（1428-?）の自著とする説には賛否がある。文明年間かやや下る頃の成立と考えられている。収録字数8249字。

戦前『日本古典全集』に影印刊行されているが、不鮮明な箇所が多い。『古辞書研究資料叢刊 第4巻』（大空社，1995）に手写による翻刻・索引がある。

以上の六本のうち、本稿では、原本の影印を確認できるもののうち、年記のある中で

³ 特に言及のない場合は、『古辞書研究資料叢刊』の通し番号の総数に従う。

は最も古い②と、付音が豊富に存する③を取り上げる。

以下の考察は、②と③の影印本に従って漢字と字音を入力した、Excel ファイルのデータベース（康凱欣氏と共同で作成）に基づくものである。このデータベースでは、原本の字体とは別に「字種」の列を設けており、「漢字データベースプロジェクト」の「宋本廣韻データ」を参照する都合上、多くの漢字をいわゆる旧字体で入力している。そのため、本稿では字種を列挙する際に旧字体を用いているが、これは原本の字体を反映しているわけではない点をことわっておく。

なお、原本調査はなし得ていないため書誌的な事項については各影印本の解題に譲り、以下では付音の在り方とデータベース作成上の校訂方法を中心に論じる。

2.2 大東急記念文庫蔵本（大東急本）

大東急本は、見出し字の右傍に和訓が、左傍に字音が付されており、原則として一字につき音訓は一つだけである。冒頭の「伊部平」を例にとると、「雷」「隆」「今」……と見出し字が続き、それぞれの字の右傍に「イカツチ」「同」「イマ」……、左傍に「ライ」「リウ」「コン」……と書かれている。以下引用に際しては、これを「雷^{イカツチ}隆^{ライ}同：イカツチ^{イマ}今^{コン}」のように表現し、所在表示は丁数または影印本のページ数に拠る。

「伊部平」から 15 丁オモテの「寸部它」まで、1 面あたり 8 行、1 行あたり 20 字前後の配分で見出し字が並ぶ。本稿ではこの範囲を分析の対象とし、ス部他の後にある、平仄に従って意味が異なる字を列挙した「両音」は対象外とする。

大東急本では、随所に抹消符や補入符が施されており、その訂正が欄外になされていることが多い。しかし、改装の際に上下を切断した痕跡があり、そのために切れてしまった箇所が存し、その補筆が随所に確認される（川瀬 1986: 827）。また、下部に損傷があり、確認できなくなってしまった見出し字もいくらか存する。

イ部平～ス部他の総字数は、川瀬（1986）の計上では 3458 字（平声 1607＋他声 1851）とある（p.834）が、稿者の計算では 3479 字である⁶。このうち、見出し字が欠損しており判読できない 11 字と、和訓（字音語を除く）のみが記されたものを除外して、

⁴ <http://kanji-database.sourceforge.net/index.html>。2022 年 2 月 17 日最終閲覧。

⁵ <https://github.com/cjkvi/cjkvi-dict/blob/master/sbgy.xml> に XML データが公開されている（2022 年 2 月 17 日最終閲覧）。本調査では、このデータを CSV ファイルに加工したデータを利用している。

⁶ この値は、①下部の欠損部分について、たとえ見出し字が確認できなくても音訓の一部が確認される場合は一字分として計上し、見出し字・音訓が確認できてもその見出し字が補筆されている場合には一つにまとめる、②抹消符のみが施される字（2 丁オモテ 3 行目「虞」の前の「盧」など）は計上しない、③欄外に記された補入（8 丁ウラ 4 行目の「噤」など）は計上する、という基準に拠るものである。また、3 丁ウラ 4 行目の「磨」と「飛」の間にある「土」のような字と、15 丁オモテ 5 行目の「綜」と「撰」の間にある耳偏は、計上していない。

仮名による付音のある見出し字のみを抽出すると、3256字となった⁷。

なお、大東急本には、原本から書写する際に、先に漢字をまとめて移し、次いで音訓を付すという作業を、かなり機械的に行っていた痕跡が、随所にうかがえる。9丁オモテ7～8行目の「ナ部他」を重複して書写した後に取り消している箇所において、音訓の付与が途中で止まっていることにも明らかであるが、13丁ウラ1行目の「蜜^{キヒシ}緊^{ミツ}キヒシ^{キル}切^{ケン}截^{セツ}斬^{セン}剪^{セン}研^{セン}減^{キユ}メツ」といった漢字と付音のずれからもうかがえる。2丁ウラ1行目・3丁オモテ6～7行目など、連続して付音を欠く箇所も散見されるが、これらは移し落としとみられる。また、不審な付音・付訓がまま見受けられるが、「イーク」「レーシーミ」「ツーゾーン」「コーユーエ」「カーヤ」といった差違については、機械的な書写に起因する誤りが多いとみられる。

2.3 龍門文庫蔵本（龍門本）

龍門本は、大東急本とは異なり、1面8行の墨界が引かれ、1行あたり5つの項目（熟語も存するため「項目」と呼ぶ）が配されている。各項目では、原則として、見出し字の右下に和訓が、左下に字音が付されている⁸。字音・和訓が複数に及ぶ項目も多く、例えばイ部他声の「古」字では、イからはじまる和訓「イニシエ」と字音「コ」の他に、「フルシ」という和訓が記されている。本稿では、特に区別が必要な場合には、所属部と語頭音が一致する和訓（イニシエ）を「代表訓」、一致しない和訓（フルシ）を「別訓」と呼び分けることとする。また引用に際しては、「古^{イニシエフルシ}」のように、代表訓と字音を上下に併記し、続けて別訓を示すこととする。所在表示は、影印本のページ数（漢数字）と行数（算用数字）に拠る。

「以部平」から「寸部它」までは55丁に及び、その後書き漏らしとみられる「礼部平」に2字、「礼部它」に3字が配される。本稿ではこの範囲の項目を分析の対象とし、その後が続く「両音」や六十四卦の書き入れは対象外とする。

この範囲の総項目数は、『古辞書研究資料叢刊』の翻刻の通し番号によれば3907項目となるが、本稿では、斜線で取り消されているため翻刻に反映されていない「頂^{イタダキテ}イ^{チヤウ}」〔イ他・二七五6〕と「雲^{クモ}ッ」〔ク平・三三六2〕、また欄外に書かれた「疝^{ヒサシ}」〔ヒ他・三七四3〕も分析対象に含める。一方で、熟語が11項目⁹見えるが、本稿は単字の音

⁷ 冒頭1丁オモテ2～3行目の「遑（クハウ）」より前の24字には、薄い墨と、所々にその上を濃い墨でなぞった跡が看取される。影印本では判断しがたいが、次の付音を認めた。雷（ライ）隆（リウ）今（コン）池（チ）泉（セン）庵（アン）廬（ロ）沙（シャ・サ）礪（シン）磯（キ）坤（コン）陶（タウ）絲（シ）殷（イン※右傍）祈（キ）嘶（ゼイ）傷（シヤウ）創（サウ）勞（ラウ）。

⁸ 最初は方針が定まっていなかったのか、一丁オモテでは逆の例が多い。また、字音が見出し字の左下に傍記される例も散見される。

⁹ 「吏幹」「悵惜」「理非」「領知」「領掌」〔以上リ平・二九一5〕、「累代」「類親」「留守」「流浪」〔以

形を考察対象とするため、これらは除外する。更に、和訓（字音語を除く）のみが記された項目を除外して、仮名による付音のある項目を抽出すると、3669 項目となった¹⁰。

なお、龍門本では「エ」と「エ」が両方用いられているが、どちらであるか判断できない例も多いため、「エ」に統一した。

2.4 見出し字の校訂

両本とも随所に誤りが確認されるが、『平他字類抄』ならびに諸本を対照し、所在や字の排列順を勘案することで、ある程度まで校訂が可能となる。龍門本については、この校勘作業が木村晟氏によって行われており、龍門本・『色葉集』・『伊露葩字』・『新韻集』・『平他字類抄』における見出し字と注文を対照した表が木村（1998・2001）に公開されている。また木村（1999a・b）では、龍門本の全見出し字について、他四本との対照結果を細説し、一致状況を検討している。これらの成果に導かれつつ、データベースの作成にあたっては、次のような基準で校訂することとした。

A 出現字体と合致する字種が、字書類（『広韻』を使用）に見出せない場合、あるいは見出せたとしても常用字でなくかつ音訓が対応しない場合

①他資料と比較し、和訓・字音の対応する字種がある場合は、その字種を採る。

・「𪛗^{同：ハルカナリ}虫少^{ベウ}」〔大ハ他・七二四 2〕は、「𪛗^{同：ハルカナリ}少^{ベウ}」〔龍ハ他・二八〇 8〕により、「𪛗」に校訂。

・「𪛗^{イサム}シツ」〔龍イ他・二七四 8〕は、「𪛗^{イサウ}シツ」〔大イ他・七二二 2〕により、「𪛗」に校訂。

②他資料との比較から期待される本来の字種と、記されている字音や和訓が対応しない場合は、特定の字種の認定を保留する（大東急本 4 例、龍門本 14 例¹¹）。

・「𪛗^{サカイ}工魯^{キヤク}」〔大サ平・七四五 3〕は、他資料との比較から「疆」が期待されるが、字音が不審。また、この次の項目が「疆^同キヤウ」である。












上ル平・二九二 7〕、「勾引」〔カ他・三〇四 2〕、「𪛗^{言菊}言菊（鞠か）」〔ノ平・三三四 4〕。

¹⁰ 仮名の付音が無く反切のみが記された項目が、「𪛗^{有竜}有竜^{カ公切馬頭也}」〔ク平・三三六 5〕の 1 例のみ見えた。代表訓を欠くが、『伊露葩字』に見える「クチトリ」が正しい形として想定される。大東急本には「クチハミ」〔ク平・七三九 8〕とあるが、直後の「蛇」字の和訓に引きずられたものであろう。

¹¹ 𪛗女耶（ヤ）〔大ハ他・七二三 6〕、𪛗イ由（レウ）〔大ツ平・七三五 6〕、𪛗工魯（キヤク）〔大サ平・七四五 3〕、𪛗イ秦（シン）〔大ミ平・七四六 5〕、𪛗言忿（ソウ）〔龍ハ平・二七七 6〕、𪛗++姓久（キョ）〔龍ハ平・二七八 5〕、𪛗ム門（フ）〔龍ワ平・二九八 4〕、𪛗虫雋（サン）〔龍カ平・三〇一 2〕、𪛗童兌（サン）〔龍カ平・三〇一 7〕、𪛗イ責（サイ）〔龍カ他・三〇五 2〕、𪛗光早（サ）〔龍カ他・三〇五 7〕、𪛗車丸（キン）〔龍ナ他・三二六 5〕、𪛗土貴（キ）〔龍マ他・三四三 4〕、𪛗東晉（シン）〔龍サ他・三六一 7〕、𪛗孚鳥（フ）〔龍シ平・三六八 6〕、𪛗𪛗絲（シヤ）〔龍シ平・三六八 7〕、𪛗++勢（セイ）〔龍シ他・三七〇 5〕、𪛗ム允（シヨ）〔龍モ他・三七五 6〕、以上全例。



・「諗^{ハカル}ッウ」〔龍ハ平・二七七五〕は、他資料との比較から「諗」が期待されるが、字音が不審。

③他資料との比較によっても、本来の字種が特定できない、または、候補は挙げられても字体が大きく乖離する場合は、分析の対象外とする（以下全例）

- ・「イ^{ハシヘル}々^{ヘン}」〔大ハ他・七二三八〕（侍？）
- ・「雨^{ハメ}泛^{ヘン}」〔大ハ他・七二四一〕
- ・「^{タハミ}壬^ラ」〔大タ平・七三三八〕
- ・「^{ツトム}イ^{キョク}」〔大ツ他・七三六六〕
- ・「^{ハス}西^{ホウ}走^{ホウ}」〔龍ハ他・二八〇二〕
- ・「^{同：フク}曲^{テン}貝^{テン}」〔龍ヲ他・二九七四〕（奠？）
- ・「^{カラシ}厂^{キヤウ}日^{キヤウ}ヒ」〔龍カ他・三〇七二〕
- ・「^{同：フバコ}竹^サハ衣^サ」〔龍フ他・三四七三〕
- ・「^{カイ}木^{カイ}刃^{カイ}」〔龍コ平・三四九二〕
- ・「^{ビンツラ}日^{クワン}ロ^{クワン}」〔龍ヒ他・三七四二〕（卯？）
- ・「^{スシ}++^{スシ}鯨^ロ」〔龍ス他・三八〇四〕

B 出現字体と合致する字種が、他資料との比較から期待される本来の字種と異なる場合

①記されている字音が、出現字体と合致する字種と対応する場合は、記されている字種を採る。

- ・「^{アン}閨^{カハヤ}」〔大カ平・七三〇五〕は、他資料との比較・和訓から「閨（セイ）」が期待されるが、出現字体である「閨」の字音と一致するので、「閨」の字音として処理する。
- ・「^{同：タカウアルイハ}或^ク」〔龍タ他・三一五六〕は、他資料との比較・代表訓から「忒（トク）」が期待されるが、出現字体である「或」の字音と一致するので、「或」の字音として処理する。

②記されている字音が、出現字体と合致する字種とは対応しない場合は、特定の字種の認定を保留する¹²（大東急本 13 例、龍門本 13 例¹³）。

¹² ただし、出現字体と対応する字種と他資料との比較から期待される本来の字種とが異なっている、両者が字体上紛れやすかったと考えられる場合は、この限りでない。具体的には、治一治、干一干、己一巳一巳、未一未、傳一傳、旦一且、焰一燄、詔一詔、詰一詰、眊一眊、幻一幼、博一搏、斂一斂については、字体上の差違は問わず、記されている字音と合致する方の字種を採用した。

¹³ 盧（フ）〔大ハ平・七二二八〕、迴（キヤウ）〔大ハ他・七二四二〕、禮（デウ）〔大ニ平・七二四五〕、荅（ライ）〔大ヲ他・七二九三〕、鬼（シウ）〔大カ平・七三一二〕、芟（ガイ）〔大カ平・七三一五〕、暮（カツ）〔大カ他・七三一八〕、蜉（ラチ）〔大ヲ他・七三八一〕、鸞（ヨ）〔大ウ平・七三八六〕、訢（コウ）〔大ウ他・七三九二〕、代（バツ）〔大ウ他・七三九三〕、鑣（ヘウ）〔大ク平・七四〇二〕、疑（キョウ）〔大コ平・七四三三〕、薨（イウ）〔龍イ平・二七七一〕、逼（イ）〔龍ハ平・二七七五〕、咎（チャウ）

- ・「廻^{同：ハルカナリ}_{キヤウ}」〔大ハ他・七二四 2〕は、他資料との比較・和訓から「廻」が期待され、字音も「廻」ではなく「廻」に一致する。
- ・「逼^{ハンサウ}_イ」〔龍ハ平・二七七 5〕は、他資料との比較・和訓から「匱」が期待され、字音も「逼」ではなく「匱」に一致する。
- ・「答^{ハコ}_{チヤウ}」〔龍ハ他・二七九 6〕は、本来の字種「筭（キョ）」とも出現字体と合致する字種「答（チ）」とも対応しない。

A②③とB②を除くと、付音のある見出し字は、大東急本は 3235 項目、龍門本 3635 項目となる。以下の分析は、基本的にこれらの項目のみを対象とする。

3 漢字音の数量的概観

3.1 大東急本

大東急本は「沙^{シヤ}_{イサコ}サ」〔イ平・七二一 2〕を除き、一つの見出し字に対して字音は一つだけである（当該例もシヤとサは別筆とみられる）。また、和訓が字音語でかつ別音形の付音がある例は、「鉢^{ヘチ}_{ハツ}」〔大ハ他・七二三 8〕「褐^{カチ}_{カツ}」〔大カ他・七三二 1〕「役^{ヤク}_{エキ}」〔大ヤ他・七四一 2〕「幕^{マク}_{バツ}」〔大マ他・七四一 7〕「碁^ゴ_キ」〔大コ平・七四三 1〕「繪^エ_{クワイ}」〔大エ他・七四三 6〕の 6 例のみである。よって、3235 項目における字音の総数は 3242 音となる。

ただし、イロハ引きの字書であるため、同一の見出し字が複数の項目に跨がって出現する例がある。そこで、異体字を統合して、異なり見出し字数（字種数）を求めると、以下の通りとなる。

4 箇所：11 字種（謂寒急強教故尚親崇鮮當）

3 箇所：63 字種（己維陰介蓋希曲苦荊拳研遣言後向更合自周充重書除震羨前漸楚蘇促旦中直徒度透之背白薄皁皁碧方亡免幽容隆慮僚梁類濟聽芻轉關頼閑偷繫賒）

2 箇所：376 字種（辰辛亥愛安暗闇夷慰畏衣溢確運映延炎縁於奧王屋下何加荷過解角革乾喚干換漠環簡翰還閑奇幾揮起輝宜祇詰丘去居渠虛競狂仰駒儺備訓啓景稽劇激倦賢元原古姑孤戸胡語交候公好皇荒行衡鴻鵠昏昆根痕差鎖催戩塞菜載載作策索錯傘使刺姿止慈治爾而室疾質者蛇若主就秋終宿祝縮渚庶助女徐少床掌沼消祥情

〔龍ハ他・二七九 6〕、刃（シヤウ・ガイ）〔龍ヲ他・二九七 4〕、儲（シウ）〔龍カ平・三〇三 8〕、凋（カク）〔龍カ他・三〇六 4〕、叨（コウ）〔龍タ他・三一五 8〕、贖（ドク）〔龍ソ他・三一七 6〕、填（シン）〔龍ツ他・三二一 2〕、屠（チヨ）〔龍ア他・三五八 4〕、皺（シユン）〔龍シ平・三六八 4〕、蕞（エン）〔龍シ平・三六九 3〕、桴（シツ）〔龍ヒ他・三七三 7〕、以上全例。

飾信審神進仁塵甚須吹垂翠遂嵩生盛精請切設節先占洗旋薦然繕疏疎祖創爽操早
遭像造則即息足速丹端談知地致注著調跳珍津通低汀艇敵田妬奴倒唐投蕩動奈難
肉如寧蚤媒泊縛籍鳩反晚卑披疲被微美標漂不夫布負附武副復柄鞭保慕包傍房ト
魔麻枕慢漫稔面茂儲目尤悶也有由融翼欄蘭理離龍旅亮凌寮糧良陵力輪令鈴麗列
劣櫓路漏論話于冀勞啼嗽啞奠婁寢對屬岑巔并弩彌從惡惠憑應戀截攝舉晉晨曠杪
柯梳條棘棠樂權鬱歸殘氈沒滌潛潭濱爭爲甕嘗疇發眸瞻砌稱遂竊綏縱羞翅舅舊
蓼藏裙罩覺詢贖跣輕辭迴邁醫釋鎮阡靈竟饒駸藥齡俱妍局曆每絕繡脫祛)

1 箇所：2250 字種

同じ見出し字が 2 項目以上に現れる 450 字種のうち、複数の音表記が見られるのは 98 字種である。これに、1 項目に 2 音が見られるのは 7 字種を合わせた 105 字種を分類すると、次のようになる。なお 3 項目以上に現れる場合には、それぞれの字音の例数を算用数字で示す。

○音類の差違によるもの (10 字種全例、和訓を【 】に示す)

向：カウ【ナンナンナ^(トカ)ス】／カ□^(ウカ)【ムカウ】／シヤウ【サキニ】

度：タク【ハカル】／ト【タヒ】／ト【ノリ】

差：シ【タカウ】／シヤ【サス】

塞：サイ【ソコ】／ソク【フサカル】

洗：セイ【アラウ】／セン【ス、ク】

注：シユ【ソ、ク】／チウ【シルシ】

著：ジャク【ツク】／チヨ【アラハス】

不：ヒ【イナヤ】／フ【アラス】

惡：ヲ【ニクム】／アク【ア、シ^(ママ)】

樂：ケウ【タノシム】／ラク【ネカウ】

○呉音と漢音の差違によるもの (20 字種全例)

沙 (サ・シヤ)

教 (ケウ 2 / カウ 1 / ケキ 1)

碁 (ゴ・キ)

己 (コ 1 / キ 2)

鉢 (ハチ・ハツ)

言 (コン 1 / ゲン 2)

褐 (カチ・カツ)

間 (ケン 1 / カン 2)

幕 (マク・バク)

繫 (ケ 1 / ケイ 2)

繪 (エ・クワイ)

衣 (エ / イ)

役 (ヤク・エキ)

競 (キヤウ / ケイ)

通（ツウ／トウ）
奈（ナイ／タイ）
目（モク／ホク）

恵（エ／ケイ）
饒（ネウ／テウ）
糧（ラウ／リヤウ）

○濁点の有無の違いによるもの（26 字種）

自（シ 1／ジ 2）
充（シウ 1／ジウ 2）
羨（セン 2／ゼン 1）
前（セン 1／ゼン 2）

漸（セン 1／ゼン 2）
亡（ハウ 2／バウ 1）
何（カ／ガ）
還（ケン／ゲン） など

○音韻の混同の疑いがあるもの（9 字種）

除（チヨ 1／ジヨ 2）のような四つ仮名の動揺が 5 字種、仰（キヤウ／キヨウ）のような才段長音の開合の動揺によるものが 2 字種、調（チウ／テウ）のような才段拗長音とウ段拗長音の動揺が 2 字種ある（5.1 で後述）。

○仮名遣いの相違によるもの（14 字種）

關（クハン 1／クワン 2）のようなカ行合拗音のクワ／クハ表記の差違が 8 字種、龍（リヨウ／レウ）のようなイ段＋ヨウ／エ段＋ウの差違が 3 字種、倒（タウ／タフ）のよう一ウ／一フの差違が 2 字種と、祝（シウ／シユウ）がある。

○その他（27 字種）

教（ケウ 2／カウ 1／ケキ 1）
介（カイ 2／カウ 1）
僚（レウ 2／レイ 1）

免（メン 2／メ 1）
除（シヤ 2／キヤ 1）
王（ワ／ワウ） など

3.2 龍門本

龍門本は、一つの見出し字に複数の付音がある項目が 117 あり、うち 111 項目に 2 音、6 項目に 3 音が認められる。よって、3635 項目における字音の総数は 3758 例となる。

また、大東急本と同様、異体字を統合して、異なり見出し字数（字種数）を求めると、以下の通りとなる。

8 箇所：1 字種（更）

5 箇所：4 字種（介幾許判）

4 箇所：14 字種（慰蓋環故周尚漸疏促如彌從當釋）

3 箇所：107 字種（威維迂映延過岳乾寒干顏去強受苦駒景倦研言好差際在索資爾自俊除勝
沼消信吹崇正設鮮蘇速存檀致注著直汀天妬度箱伐晚罷被微美漂夫負文亡滅約容
欲翼螺蘭隆慮梁傳兩處寢弩懷條棠樂殷沒濟濺甃嘗瞻禮經羈翔肆裙辭關勒顛饒體齊
賴偷欵繫）

2 箇所：470 字種（辰甲辛申葵旭暗委畏衣謂遺逸苾苾員蔭陰韻英炎緣遠汚奧襖佳加歌箇華
俄牙回該角葛褐萱瓦刊喚官漢竿簡翰頑喜嬉希揮既棄起輝儀宜祇義詰居凶叫恭仰凝
極巾禁吟空櫛群啓形稽荊計劇潔結懸軒元原乎古呼姑孤戶菰語候光公向洪行衡降項
劫刻告酷今困鎖催塞採菜裁載材財咲崎作朔傘使刺指斯施止事侍慈持時滋軸悉酌若
主首囚終襲酬住住宿縮春醇渚庶書助徐唱床彰抄掌祥肖鐘上食審親進震塵須垂翠遂
嵩菅澄清生盛精雪占泉洗旋薦前繕曾楚疎爽早相鎗造側則即息足卒待替題嘆旦端蓄
註町調眺長珍津通爪提梯艇適添纏殿徒都砥投逃頭騰動撞豚曇鈍乍任寧之破背媒拍
縛幡鳩帆繁盤卑披比疲菱標瓢評瓶布扶阜武副復墳平柄蔑編保捕甫慕暮包放方萌鋒
傍暴摩妹枕密稔務盤免茂孟蒙目尤猶猷由祐誘融要抑欄離流亮僚僚涼糧良遼力輪
隣令麗憐練露弄漏録亂仍胃冤剝劬勁勞叨嗽噫噬囂圍壘奚嫫婢嬌學實將對屬嶮嶽彈
徑忝惠憑應戀戰拉拱舉斫斷旌晉晨曠杪柯棹橡榮槁權樞橈鬱渾湍漿潛瀛囊爭爲猜疇
癰發礫祀祠穹竊箒籌綏絨縱差羸翳翹聊聰脩臍與舊芻茲苾苾藏蠹街覺背賁賁蹇蹇蹇
軼輕輒輦轉迴逋邁邁醪銜鎖陬隱靄靄靄靄靄靄靄靄靄靄靄靄靄靄靄靄靄靄靄靄靄
執絕繡脫蟻祛騷）

1 箇所：2290 字種

2 箇所以上に現れる 596 字種のうち、複数音が見られるのは 109 字種である。これら
と、付音が複数に及ぶ 117 字種との和集合は 193 字種であり、それらは次のように分類
される（一項目内の複数音は「・」で、別項目は「／」で区切る。例えば「更（キヤ
ウ・カウ／キヤウ 1／カウ 6）」は、「キヤウ」「カウ」の二音が付される項目が 1 例、
「キヤウ」のみの項目が 1 例、「カウ」のみの項目が 6 例あることを示す。）

○音類の差違によるもの（14 字種全例）

射：シヤ・エキ・ヤ【イル・イテ】

祝：シウ・シユク【イワウ・イノル】

否：ヒ・フ【イナヤ】

論：リン・ロン【ロンズル】

度：タク・ド【ワタル】／タク・ト【ノリ】／ド【タビ】

枳：キ・シ【カラタチ】

谷：コク・ヨク【タニ】

茄：キヤ・カ【ナスビ】

欠：ケツ・カン【ナシ】

溫：ロン・ウン【アタタカナリ】

截：セツ・サイ【キル】

樂：ラク【ヨロコビ】／ラク【タノシム】／ゲウ【ネガウ】

副：フク【カナウ】／フウ【ソユル】

暴：ハク【ニワカ】／ホウ【ホス】

○別字種の混淆によるもの（2字種全例）

巳：イ・シ【スデニ】（シは「巳」の字音）

替：タイ・サン【カハル】（「賛」に見せ消ちして欄外に「替」と訂正）

○呉音と漢音の差違によるもの（87字種）

①一項目内複数音（45字種）

色（シキ・シヨク）

怒（ヌ・ド）

痛（ツウ・トウ）

警（キヤウ・ケイ）など

②別項目複数音（27字種）

釋（シヤク3／セキ1）

箱（サウ1／シヤウ2）

強（カウ2／キヤウ1）

美（ミ2／ビ1）など

③①＋②（15字種）

更（キヤウ・カウ／キヤウ1／カウ
6）

去（コ・キヨ／キヨ2）

微（ミ・ビ／ビ2）など

亡（マウ・パウ／マウ1／パウ1）

○同一字音体系内での差違（1字種）

便（ビン・ベン／ビン1／ベン1）は、ビンもベンも呉音と考えられる。

○長短の異なり（2字種）

嵩（ス／スウ）、噫（イ／イイ）の2例。なお由（ユ／ユウ）などは「呉音と漢音の差違によるもの」に分類した。

○濁点の有無の違いによるもの（14字種全例）

俊（シユン2／ジユン1）
著（ヂヤク2／チヤク1）
棠（タウ2／ダウ1）
繫（ケ1／ゲ2）
材（サイ／ザイ）
傘（サン／ザン）
上（シャウ／ジャウ）

調（デウ／テウ）
逃（テウ／デウ）
幡（ハン／バン）
傍（ハウ／バウ）
覺（カク／ガク）
輒（テウ／デウ）
狀（シャウ／ジャウ）

○音韻の混同によるもの（7字種）

全例が、漂（ヒウ2／ヘウ1）などの、オ段／ウ段拗長音の混同とおぼしき例である（5.1.3に後述）。

○仮名遣いの相違によるもの（4字種全例）

幼（ヨウ・エウ・コウ）
揖（イツ・イフ・イウ）

尤（イウ／ユウ）
鐘（シヨウ／セウ）

○その他（67字種）

愧（クワイ・キ）
騁（テキ・ヘイ／チャウ）

偷（ユ2／チウ1）
哈（カイ／タイ）など

「音類の差違によるもの」の中には、例えば「樂」字では【ネガウ】に「ゲウ」、【タノシム】に「ラク」とあるように、中国原音における意義の違いを正しく反映した付音もある一方、和訓と対応しない付音もある。この点は大東急本の方が龍門本に比して正確なようであり、例えば、大東急本では「塞」の字音を、〈要塞〉を意味する【ソコ】の訓では「サイ」、【フサグ】の訓では「ソク」としており、これは中国語原音の区別に応じるものであるが、龍門本ではどちらも「サイ」としている¹⁴。「暴」に至っては、龍門本では【ニワカ】に「ハク」、【ホス】では「ハウ」と付音しており、逆転している（大東急本は前者に「ハウ」と付音するが、後者は付音を欠く）。

また、龍門本は大東急本より字音総数が多いにも拘わらず、「濁点の有無の違いによるもの」の総数が、大東急本の半分ほどしかない点は注目される。この数値は、濁音に対する濁点加点が随意的であればあるほど増加するものであるから、龍門本は、大東急本に比して、濁音に対する濁点付与の義務性がかかなり高いと考えられる。しかし、実際には濁音が期待されるにも拘わらず濁点の付与されない例も一定数存するため、本稿の分

¹⁴ ただし、龍門本では【ソコ】の和訓が【ソムル】となってしまっている。

析では、濁点が無いことを根拠に清音と見なすことはしない。

なお、濁点の加点例は、大東急本は 315／3242 音、龍門本は 618／3758 音である。

4 字音体系について

4.1 呉音と漢音

「平他」の区別は原則として中古音の平仄と一致する¹⁵ため、その音形も規範的には漢音が期待されるものとも思われるが、実際には既に見たように呉音が多く現れる。両資料に現れる字音を、『三省堂五十音引き漢和辞典 第二版』（三省堂、2014）に従って、呉音か漢音か判定したところ、表 1 のような結果となった¹⁶。両資料とも漢音の方が多いが、大東急本は呉音の倍以上の開きがあるのに対し、龍門本はさほど差が目立たず、呉音が多く用いられていることが明らかである。なお「呉音（清濁のみで対立）」とあるのは、例えば大（呉音ダイ／漢音タイ）などが該当し、この場合「ダイ」の付音があれば呉音と判定したが、「タイ」とあっても漢音とは判定できないため、比較には適さない。あくまで参考として示したものである¹⁷。

表 1 大東急本・龍門本における呉音・漢音

	大東急本	龍門本
呉音（清濁のみで対立を除く）	206 字種 244 項目	339 字種 433 項目
漢音（清濁のみで対立を除く）	464 字種 570 項目	424 字種 528 項目
参考：呉音（清濁のみで対立）	105 字種 118 項目	197 字種 257 項目

同一の部に属し、同一項目と考えられるにも関わらず、大東急本と龍門本とで音が異なり、かつそれが呉音と漢音の差であるものを摘記すると、以下のようになる（一字に呉音・漢音双方の字音が付される項目は除外する）。

○大東急本が漢音、龍門本が呉音（計 85 例）

¹⁵ 実際には中古音の平仄と合わない例が散見されるが、それらは『平他字類抄』未収録字に目立ち、増補の過程で配属を誤ったものかと思われる。ただし、『平他字類抄』の段階で既に平仄を誤り、それを引き継いでいる例も若干存する。

¹⁶ 判定の対象は、呉音・漢音双方の音形が記載されている字に限定し、「麦（バク）」「讓（ジャウ）」のように、漢音のみが掲載されている字については対象外とした。

¹⁷ そもそも、呉音・漢音が清濁のみで対立する字と、清濁以外で対立する字との間には、質的な異なりのあることが、松井（1971）や湯沢（1977）からうかがわれる。ちなみに、龍門本で一項目に複数字音を示す 117 項目のうち、清濁のみで対立する両音形を併記した例は皆無である。

言ゲンーゴン〔イ平【イウ】〕
寐ビーミ〔イ他【大イヌ・龍イネル】〕
濁ダクーヂヨク〔ニ他【ニゴル】〕
縦シヨウージウ〔ホ平【ホシイママ】〕
經ケイーキヤウ〔ヘ平【ヘル】〕
通トウーツウ〔ト平【トアル】〕
問ブンーモン〔ト他【トウ】〕
整セイーシヤウ〔ト他【トトノウ】〕

カリヨクーリキ〔チ他【チカラ】〕
塗トーズ〔ヌ平【ヌル】〕
衆シウーシュ〔ヲ平【ヲラシ】〕
饒テウーネウ〔ヲ平【ヲラシ】〕
惟イーユイ〔ヲ平【ヲモウ】〕
收シウーシュ〔ヲ平【ヲサム】〕
惜セキーシヤク〔ヲ他【ヲシム】〕
釋セキーシヤク〔ヲ他【ヲク】〕 など

○大東急本が呉音、龍門本が漢音（16 例、以下全例）

箱サウーシヤウ〔ハ平【ハコ】〕
測シキーソク〔ハ他【ハカル】〕
妊ニンーシン〔ハ他【ハラム】〕
薺タイーテイ〔ホ他【ホヅ】〕
箱サウーシヤウ〔ト平【トコ】〕
誨ケークワイ〔ヲ他【ヲシウ】〕
數シユース〔カ他【カズ】〕
其コーキ〔ソ平【ソレ】〕
撞トウータウ〔ツ平【ツク】〕

嗟サーシヤ〔ナ平【ナゲク】〕
賣マイーバイ〔ウ他【ウル】〕
擇シヤクータク〔エ他【エラブ】〕
冤フムーエン〔ア平【アヤマリ】〕
競キヤウーケイ〔ア他【アラソウ】〕
寂ジヤクーシユク・セキ〔シ他【シツ
カナリ】〕
炬コーキョ〔ヒ他【ヒタキ】〕

以上のように、龍門本は大東急本に比して、呉音が顕著に多く用いられているが、その理由は詳らかでない。付音した人物の言語環境による違いなど、様々な要因が考えられるが、例えば内容が仏教に関係するといったような積極的に呉音を用いなければならない理由は想定しがたい。後述するように、現代の慣用音に通じる付音が多く見られることも踏まえると、龍門本には当時の流通漢字音がかなりの程度反映されており、その中に呉音の占める割合が大きかったのではないだろうか。それに比して、大東急本は、規範意識によるものか、原本の姿を相対的に良くとどめているためかは定かでないが、呉音を多く混入させつつも漢音を基本としているように思われる。

最後に、大東急本・龍門本ともに、同じ見出し字が二項目以上に跨がって現れ、かつそれぞれの資料で、その音形が呉音が漢音の一方しか現れない例を全て抜き出すと、次の通りである（当該漢字に続けて呉音形／漢音形を示し、出現する音形を太字で示した）。太字となっているのは、現代でも一般に用いられる形がほとんどである。特に、両本が呉音しか挙げない漢字 17 字について、「常用漢字表」の音訓欄と照合させてみる

と、そもそも字音が採用されていない「弥」と、双方の音形が採用されている「如」を除く 15 字は、太字にした呉音のみが採用されている。おそらく、大東急本が成立した 1500 年頃には、既にこれらの字の漢音はほとんど用いられなくなっており、流通漢字音としては呉音に固定（一元化）していたのだと思われる¹⁸。

○大東急本・龍門本ともに全て漢音（右側）

維ユイ／イ	周シュ／シウ	良ラウ／リヤウ
陰オン／イン	精シヤウ／セイ	令リヤウ／レイ
映ヤウ／エイ	汀チャウ／テイ	麗ライ／レイ
簡ケン／カン	投ヅ／トウ	漏ロ／ロウ
希ケ／キ	寧ニヤウ／ネイ	舉コ／キヨ
景キヤウ／ケイ	鳩ク／キウ	舊ク／キウ
稽ケ／ケイ	武ム／ブ	尤ウ／ユウ
荊キヤウ／ケイ	柄ヒヤウ／ヘイ	關ケン／クワン
元グワン／ゲン	慕モ／ボ	
公ク／コウ	融ユ／ユウ	

○大東急本は漢音（右側）・龍門本は呉音（左側）

若ニヤク／ジャク	直ヂキ／チヨク	カリキ／リヨク
生シヤウ／セイ	由ユ／ユウ	縦ジウ／シヨウ

○大東急本・龍門本ともに呉音（左側）

苦ク／コ	布フ／ホ	毎マイ／バイ
床シヤウ／サウ	茂モ／ボウ	（慈ジ／シ）
促ソク／シヨク	屬ゾク／シヨク	（助ジヨ／シヨ）
即ソク／シヨク	彌ミ／ビ	（縛バク／ハク）
足ソク／シヨク	應ヲウ／ヨウ	（辭ジ／シ）
如ニヨ／ジョ	濟サイ／セイ	

4.2 唐音

¹⁸ 沼本（1973）は、使用する字音体系の規範性が想定しがたい、平安鎌倉期の変体漢文資料の音注を分析して、各漢字に呉音・漢音のいずれか一音が固定化する傾向の存在を指摘している。近年、坂水（2016）や石山（2018）により、漢籍資料における呉音形の浸食という観点から、中近世におけるこの現象の具体相が論じられている。ここでは、この一音固定化を、屋名池（2005）に従い「漢字音の一元化」と表現する。

岡田（1938）によれば、『色葉文字』の見出し字の右傍には唐音が見られるという。また、『新韻集』にも「晴（シン）」のような唐音が見られ、『聚分韻略』の影響が考えられている（木村 2002: 347）。龍門本・大東急本でも、唐音と考えられる音形がいくつか拾えるものの、数は多くない。以下に全例を挙げる。

- ・箇コ〔大カ他・七三二 1〕〔龍カ他・三〇五 7〕〔龍ツ平・三一九 2〕
- ・話ワ〔大カ他・七三二 2〕〔大モ他・七四八 6〕〔龍モ他・三七五 7〕
- ・打タ〔大ウ他・七三九 3〕（龍なし）
- ・乗ヒン〔龍ト他・二八九 3〕（大はヘイ〔七二七 1〕）
- ・茶サ〔龍チ平・二九〇 2〕（大はチャのみ〔七二七 4〕）

話（ワ）・打（タ）・茶（サ）は、現代でも一般的に用いる音形であり¹⁹、具体的な考証も既に存する（高松 1982 第六章）。箇（コ）・乗（ヒン）は典型的な唐音であるが、「真箇（シンコ）」「乗弘（ヒンホツ）」といった語が『節用集』の類に見出せる。以上の5音は、『聚分韻略』等に体系的に記された唐音を反映したものではなく、その字の流通漢字音がたまたま唐音であったと見た方がよいであろう。

なおこの他、「寮（リヤウ）」等も唐音と考えられるが、これは 5.1.1 で取り上げる。

4.3 慣用音など

呉音・漢音・唐音のいずれにも分類できない例は甚だ多い。複数字種の混淆や誤写に起因する例もあるが、声符からの類推による付音と思われる例が目立つ。以下に、目に付いたものを摘記する。

○龍門本・大東急本ともに見える例

- ・詐ソ〔龍イ他・二七四 6〕〔大イ他・七二二 2〕 ※漢音サ
- ・蛙ア〔龍カ平・三〇〇 2〕〔大カ平・七三〇 6〕 ※漢音ワ
- ・瀧レウ〔龍タ平・三一〇 6〕リョウ〔大タ平・七三三 3〕 ※漢音ロウ・ラウ
- ・璽ジ〔龍シ他・三七〇 1〕〔大シ他・七四七 4〕 ※漢音シ
- ・響ケイ〔龍ヒ他・三七二 7〕〔大ヒ他・七四八 3〕 ※漢音キヤウ

○龍門本のみにみえる例

- ・鴨カウ〔龍カ他・三〇四 8〕 ※鴨アウ〔大カ他・七三一 8〕

¹⁹ ただし、「打」は中世では清音の「タ」であったと考えられている。

- ・娘ラウ〔龍ム平・三二九 2〕
- ・企シ〔龍ク他・三三八 6〕
- ・裸クワ〔龍ア他・三五七 2〕
- ・洩エイ〔龍モ他・三七六 1〕

○大東急本のみに見える例

- ・煮シヤ〔大ニ他・七二四 8〕
- ・攸シウ〔大ト平・七二六 2〕
- ・啻テイ〔大タ他・七三四 5〕
- ・滌デウ〔大ア他・七四四 7〕
- ・匏コ〔大ヒ平・七四七 7〕

※娘ニヤウ〔大ム平・七三八 3〕

※企キ〔大ク他・七四〇 5〕

※裸ラ〔大ア他・七四四 6〕

※洩セツ〔大モ他・七四八 7〕

※煮シヨ〔龍ニ他・二八二 4〕

※攸ユウ〔龍ト平・二六八 4〕

※啻シ〔龍タ他・三一三 4〕

※滌テキ〔大ス他・七四九 6〕もあり

※匏ハウ〔龍ヒ平・三七一 8〕

このうち、「蛙(ア)」「璽(ジ)」「洩(エイ)」「煮(シヤ)」「滌(ジョウ)」などは、現代でも「慣用音」として定着している。また、太宰春台『倭読要領』巻上「倭音正誤」には「瀧……倭音ラウ、龍ノ字ノ音ニ讀ムハ非ナリ」〔二〇ウ〕という記述があり、「瀧(リョウ)」は、現代の漢和辞典にこそ掲げられていないが、中近世ではある程度定着していたものと想像される。

また、次のような不審な濁音形が散見される。理由の想定できないものが多いが、いわゆる連声濁を起こした漢語形から単字の音形を析出したのではないかと想像される例もある。

- ・洒ジャ〔大ソ他・七三五 3〕(龍なし)
- ・砌ゼイ〔大ミ他・七四六 8〕〔龍ミ他・三六七 6〕
- ・戴ダイ〔龍イ他・二七五 2〕(大はタイ〔七二二 3〕) ※頂戴から？
- ・貢グ〔龍タ他・三一五 5〕(大なし) ※年貢から？
- ・均ギン〔龍ヒ平・三七二 3〕(大はキン〔七四七 7〕) ※平均から？

このような、特定の語形から析出したと考えられる例については、岡田(1941)が天正本『色葉集』における「埃」の付音例「ナイ」を挙げ、「塵埃」の連声語形に拠るものと解釈している。「嗚^{ナゲク}ア」〔龍ナ平・三二六 2〕などは、或いは「嗚呼(ああ)」から析出した形かもしれない。

現代の常用音訓である「立(リツ)」「接(セツ)」などは、-p 入声字が、無声子音に接続する際に促音化し、その「一ツ」表記を介して、単字の音形として定着したものと解釈されている(小松 1956)。この種の字音も散見されるので、以下に全例掲げる。

- ・壓アツ〔大ヲ他・七二九 5〕(龍なし)
- ・攝セツ〔大ヲ他・七二九 6〕〔大ス他・七四九 5〕(龍なし)
- ・笠リツ〔大カ他・七三二 1〕〔龍カ他・三〇五 4〕(「立」は両本ともリウ)
- ・壺カツ〔大ナ他・七三七 5〕(龍はカイ〔三二七 2〕)
- ・接セツ〔大マ他・七四二 1〕(龍はセツス〔三四四 7〕)
- ・塾チツ〔龍カ他・三〇七 4〕(大なし)
- ・闔カツ〔龍タ他・三一五 3〕(大なし)
- ・摺シツ〔龍ス平^(ママ)・三七七 7〕(大はシウ〔ス他・七四九 6〕)

このほか、**・k** 入声字の「掠^{カスム}リヤツ」〔大カ他・七三二 4〕や「逼^{セマル}ヒツ」〔大セ他・七四八 8〕も目についた。

なお、現代の通行音と連続する例を多く取り上げたので、不連続面も挙げておきたい。例えば次のような音形は、現代通行のものと異なるが、対応する中古音の音類が存する。

- | | |
|------------------------------|----------|
| ・聞アウ〔大ト他・七二七 1〕(龍なし) | ※広韻「烏甲切」 |
| ・擢タク〔大ヌ他・七二八 1〕〔龍ヌ他・二九二 4〕 | ※広韻「直角切」 |
| ・沸ヒ〔大ワ他・七三〇 3〕(龍はホツ〔二九九 6〕) | ※広韻「方味切」 |
| ・刷セツ〔大カ他・七三二 5〕(龍はサウ〔三〇五 1〕) | ※広韻「所劣切」 |

5 その他の問題

5.1 音韻史上の問題

5.1.1 オ段長音の開合

オ段長音の開合の区別は概ね保たれているが、わずかに混同例がある。以下に、中古音を基準とした時に混同の疑いのある例を全て示す。

○合音→開音

- ・寮リヤウ〔大マ平・七四一 4〕(龍なし)
- ・遼リヤウ〔龍ハ平・二七八 5〕〔龍ト平・二八七 3〕(いずれも大なし)
- ・寮リヤウ〔龍ツ平・三一八 4〕(大はレウ〔七三五 6〕)

- ・亘カウ〔龍ワ他・二九九 6〕(大はコウ〔七三〇 3〕)
- ・籥カウ〔龍カ平・三〇一 6〕(大はコウ〔七三〇 8〕)
- ・構カウ〔龍カ他・三〇七 2〕(大はコウ〔七三二 5〕)
- ・扣カウ〔龍タ他・三一五 1〕(大はコウ〔七三四 4〕)
- ・厚カウ〔龍ア他・三五七 4〕(大はコウ〔七四四 7〕)

○開音→合音

- ・悼トウ〔大イ他・七二二 1〕(龍はタウ〔二七四 3〕) ※上の字が「慟トウ」
- ・宏コウ〔大ヲ平・七二八 5〕〔龍ヲ平・二九五 1〕
- ・橙トウ〔大タ平・七三三 4〕(龍は付音なし)
- ・仰キョウ〔大ア他・七四四 8〕(龍はキヤウ〔三五八 2〕)
※仰キヤウ〔大ヲ他・七二九 3〕もあり
- ・平ヘウ〔大ヒ平・七四七 8〕(龍はヘイ〔三七二 5〕)
- ・萌ボウ〔龍キ平・三六二 3〕〔龍モ平・三七五 3〕(いずれも大なし)

まず、合音を開音とする例を見る。

「寮」については、室町時代においては、合音と並行して、唐音語として開音のリヤウも用いられていたことが明らかになっている(出雲 1963)。この字は、和訓【マド】【ツカサ】の付音として二箇所に見れるが、前者は大東急本のみ見え付音は「リヤウ」、後者は大東急本「レウ」龍門本「リヤウ」である。また「厚」については、呉音資料において開音形カウが広く見られることが指摘されている(沼本 1972)。以上は開合の混同例からは除かれるべきであろう。

声符からの類推による付音の可能性も否めない。例えば龍門本の「遼」は、豪韻字でラウが期待される「潦」に「リヤウ」とある例〔龍ニ他・二八二 4〕と合わせて、「寮」の影響が考えられる。「籥」「構」も、江韻などの「講」の影響が考えられる。しかし「亘」「扣」の二字についてはそのような理由は想定できず、才段長音の開合の混乱を反映したものと思われる。

なお、開音表記の総数(存疑例を含む)は、大東急本が 301 字種 360 例、龍門本が 349 字種 441 例である。

開音を合音とする例は大東急本に目立つが、存疑例が多い。

例えば「悼」は「痛^{イタム}ッ^ツ慟^{トウ}悼^{トウ}慟^{トウ}ッ^ツ」という並びで現れ、更に「ソク」に擦り消しの跡が見られるため、「慟」の字音を誤って二度書いた可能性がある。「仰」は別項目に「キヤウ」が見え、また「キョウ」という表記は当該項目のみに現れ、他の項目では全て「ケウ」である。「平」は漢音「ヘイ」の書き誤りとも考えられる。

また「宏」は耕韻匣母合口字で「クワウ」が期待されるが、中世の古辞書類に「カウ」や「コウ」が見えることが既に報告されている（岡本 1972）。

「橙」は、声符「登」に拠れば合音も現れ得てしまう。龍門本の「萌」も、原本の字体は「萌」であり、「朋」字は二本とも濁音の「ボウ」で現れる〔大ト平・七二六 3〕〔龍ト平・二八六 6〕。『落葉集』にも「発萌（はつぼう）」〔4 才 4〕が見える。

なお、合音表記の総数（存疑例を含む）は、大東急本が 283 字種 320 例、龍門本が 314 字種 369 例である。

豪韻唇音字は、他の字種（褒寶保報暴冒毛毫髦）はすべて合音であったが「抱」「袍」の二字のみ二本とも「ハウ」であった。これは有坂（1941）の指摘通りである。

このほか、龍門文庫本には、アウとあるべき字音がワウとなっている例が見られる。

- ・鶯ワウ〔龍ウ平・三三二 3〕※後筆（大アウ〔七三八 6〕）
- ・央ワウ〔龍ナ平・三二五 2〕（大なし）

以上、才段長音の開合に関しては、大東急本に比して、龍門本の方がやや乱れが多いという結果となった。

5.1.2 四つ仮名

龍門本では釀（ジャウ）²⁰〔龍カ他・三〇四 3〕を除き、四つ仮名の混乱が全く見られない。孌（ジャク）〔タ他・三一五 7〕は篠韻泥母字だが、「弱」に基づく付音であろう。また、「朶^{フケラ}_{ジュツ}」〔ヲ他・二九六 1〕は、中古音では澄母（広韻「藥名」と船母（広韻「秬（＝穀名）と同じ）とがあり、オケラは前者なのでチュツ・ヂュツが期待されるが、『日葡辞書』でも「白朶」は *Biacujut*（ビャクジュツ）である。「朶」を構成要素とする「述」や「術」が船母字であることも影響してか、日本漢字音はジュツに一本化されていたとみられる。

一方の大東急本では、四つ仮名がかなり乱れている。以下に混乱とおぼしき例を全て掲げる。

○ヂ→ジ（16 字種 18 例、うち濁点ありは 11 字種 12 例）

²⁰ 「釀」は、『観智院本類聚名義抄』に「如亮又人羊反」〔僧下三〇ウ〕の二音が見え、ジャウが流通音であったという見解もある（『新明解国語辞典』附録、山田忠雄執筆「歴史的仮名づかい」の[L]）

持ジ〔タ平・七三三 8〕
峙ジ〔ソ他・七三五 3〕
治^(治か)ジ〔ミ他・七四七 1〕
釀ジャウ〔カ平・七三一 5〕
杖ジャウ〔ツ他・七三六 3〕
著ジャク〔ツ他・七三六 4〕

※濁点なし

暢シャウ〔大ノ他・七三九 7〕
擇シヤク〔エ他・七四三 6〕
住シウ〔ス他・七四九 6〕

筋ジヨ〔ハ他・七二四 3〕
除ジヨ〔ニ平・七二四 5〕
除ジヨ〔ノ平・七三九 5〕
塵ジン〔ケ平・七四二 3〕
趣ジ〔大ト他・七二六 8〕
疊ジヨウ〔タ他・七三四 6〕

女シヨ〔ヲ他・七二九 7〕
女シヨ〔ム他・七三八 4〕
紉シン〔大ナ平・七三七 3〕

○ジ→ヂ (6 字種 6 例、うち濁点ありは 5 字種 5 例)

兒ヂ〔チ平・七二七 4〕
余ヂ〔シ他・七四七 5〕
沼デウ〔イ他・七二一 7〕

※濁点なし

饒テウ〔ヲ平・七二八 5〕

仍デウ〔ヨ平・七三二 7〕
剩デウ〔ア他・七四四 6〕

「ヂ」を含む、ないし、「デウ」の付音がある字と、泥母・娘母字の漢音の和集合のうち、正しい例は 9 字種 10 例であり、半数以上を「ジ」に誤っていることが分かる。

対して、「ジ」を含む、ないし、「ゼウ」の付音がある字（「雑ゼウ」は不審のため除く）と、日母字の漢音の和集合のうち、正しい例は、67 字種 79 例であり、誤りは 1 割にも満たない。

なおズ・ヅの混同例は見えなかったが、そもそも判断し得る例が、蕤（スイ）〔大ハ平・七二三 1〕・圖（ツ）〔大ハ平・七二三 3〕・藁（ズイ）〔大ハ他・七二三 7〕の三例に過ぎない。

大東急本は明応十年の書写奥書を有するが、この時代の資料にあつては混乱が甚だしいように思われる。方言的特徴を反映するものかとも思われるが、ここでは事実の指摘に留めたい。ただ、本資料は機械的に書写した痕跡が見受けられるので、大東急本の書写者ではなく、原本における混乱を引き継いでいる可能性がある。

5.1.3 オ段／ウ段拗長音

オ段／ウ段拗長音の混同と考えられる表記形が、室町時代の多くの資料について報告

されている（福島 1969・高松 1970）²¹。本資料でもそのような例が見受けられるが、特に龍門本に多く指摘できる。以下に、全例を示す（ユウとヨウの交替を同一に考えて良いかは判断が分かれるかもしれないが、便宜上ここにまとめる。）

○オ段拗長音→ウ段拗長音（18 字種 22 例）

- | | |
|-----------------|-----------------|
| ・調チウ〔大ト他・七二七 1〕 | ・漂ヒウ〔龍タ他・三一五 2〕 |
| ・條ヂウ〔大ヲ平・七二八 4〕 | ・瓢ヒウ〔龍フ平・三四五 8〕 |
| ・鵬チウ〔大ワ平・七三〇 1〕 | ・標ヒウ〔龍コ平・三四八 4〕 |
| ・松シウ〔大マ平・七四一 5〕 | ・瓢ヒウ〔龍ヒ平・三七七 7〕 |
| ・蝸チウ〔大セ平・七四八 7〕 | ・標ヒウ〔龍ス平・三七八 5〕 |
| ・恐キウ〔龍ヲ他・二九六 7〕 | ・氷ヒウ〔龍コ平・三四八 2〕 |
| ・凝ギウ〔龍ト平・二八七 5〕 | ・凌リウ〔龍コ平・三四八 2〕 |
| ・肇チウ〔龍ハ他・二七九 7〕 | ・聊リウ〔龍イ平・二七二 4〕 |
| ・條ヂウ〔龍エ平・三五一 3〕 | ・墉ユウ〔龍カ平・三〇〇 6〕 |
| ・縹ヒウ〔龍ハ他・二七九 8〕 | ・瑤ユウ〔龍タ平・三一 4〕 |
| ・漂ヒウ〔龍フ他・二九九 6〕 | ・要ユウ〔龍タ平・三一 2〕 |

※容ユウ〔龍イ平・二七二 8〕〔龍ユ平・三六四 5〕は呉音とみた。

○ウ段拗長音→オ段拗長音（7 字種 7 例）

- | | |
|------------------|-------------------|
| ・謬ビョウ〔大ア他・七四四 6〕 | ・充ゼウ〔龍ア平・三五五 6〕 |
| ・及ゲウ〔龍ヲ他・二九七 3〕 | ・稠デウ〔龍キ平・三六二 7〕 |
| ・冑テウ〔龍カ他・三〇五 5〕 | ・救ケウ・グ〔龍ス他・三八〇 1〕 |
| ・葺セウ〔龍フ他・三四七 7〕 | |

なお、この動揺は拗長音に顕著であるものの、直長音でも起こっていた例のあることが指摘されている（迫野 1975）が、龍門本では、そのような付音は見受けられなかったことを付言しておく。

5.1.4 その他

カ行合拗音の区別は概ね保たれているが、龍門本に、「菅^{スグ}クワン」〔龍ス平・三七七 5〕

²¹ 高松（1970）では『続群書類従』から『平他字類抄』も引かれており、蝸（チウ）鳥（チウ）条（チウ）鵬（チウ）箏（シウノコト）の 5 例が挙がっている（p.23）。ただし、京大本に拠れば、それぞれ蝸（テウ）〔動物平【セミ】〕、鳥（テウ）〔動物他【トリ】〕、條（テウ）〔植物平【エダ】〕、箏（シヤウノコト）〔雑物平〕、鵬（テウ）〔動物平【ワシ】〕であって、全て字音仮名遣いに適合する。

(大はカン〔ス平・七四九 1〕)と「鸛^{ツル}_{クワッ}」〔龍ツ他・三二一 1〕(大は付音なし)がある。ただし、これらも諧声符に基づけば合拗音と混同されかねない漢字である。実際に『日葡辞書』では、「鶴」を含む漢語は、いずれも合拗音の quacu で表記されている。

その他、屋韻三等のイ段＋ク／イ段＋ユク表記をめぐる問題は、音韻現象と関わり得るが、5.2 で論じる。

5.2 字音仮名遣い

字音仮名遣いについては、検討すべき点が多々あるが、本稿では目に付いた点をいくつか摘記するに留める。

「一ム」表記は大東急本・龍門本ともに例外的であり、「一ン」を専用するといつてよい。冤(ヲム)〔大ア平・七四四 4〕(※補筆部分)、屯(トム)〔龍ツ平・三一九 4〕、蟬(セン・タム)〔龍セ平・三七六 5〕の 3 例のみが確認された。

「一フ」表記は、龍門本では「揖」〔イ他・二七五 1〕の右傍に「イフ」が見える他は一例も無いが、大東急本では劉(リフ)〔リ平・七二七 6〕など 18 例を数える。しかし、そのなかで p 入声字は變(セフ)〔大ヤ他・七四一 2〕1 例のみである。

「中」は、大東急本・龍門本ともに用いられない。ただし、龍門本に達(クイ)〔龍チ平・二九〇 4〕と准(スイン)〔龍ナ他・三二七 3〕の二例がある。これらは、いずれも合口字であり、「ク中」「スキン」と書かれた先行文献の存したことをうかがわせる²²。

オ段拗長音は、エ段＋ウ／イ段＋ヨウ双方の表記が見えるが、-ng／-u 韻尾の別にかかわらず、大東急本・龍門本ともに前者が優勢である。ただし「エウ」は大東急本には皆無で、龍門本でも「エウ」が「幼」〔イ他・二七四 8〕、「祇」〔ワ平・二九九 1〕の二例(いずれも後筆か)ある他は、全て「ヨウ」である。

ウ段拗長音は、サ(ザ)行音を除けば、中世以前の「イ段＋ユウ」表記は稀とされているが、実際に両本とも、「シユウ」「ジユウ」の他は「イ段＋ウ」しか現れない。ただし「イウ」は大東急本には皆無で、龍門本でも「揖」〔イ他・二七五 1〕、「尤」〔ケ平・三四五 3〕、「麿」〔メ平・三六五 7〕の三例に見える他は、全て「ユウ」である。

²² 『平他字類抄』(京大本)では「達」字は見えず、「准」字は「シユン」である。ただ、京大本を含め、現存本は全て江戸時代の写本であり、書き改められている可能性も否めない。

屋韻三等（唇音字を除く）の字音表記は、古くは一律に「イ段＋ク」であったが、サ（ザ）行音のみ「シ（ジ）ユク」に変じることが知られている。大東急本では、「シク」「ジク」が6字種6例（叔倏夙肅蹇蹇）、「シユク」が5字種6例（宿粥縮熟宿縮）で拮抗している。一方、龍門本では「シク」が1例のみ見えるが存疑²³であり、9字種11例（祝宿叔孰夙縮熟宿縮肅寂）は「シ（ジ）ユク」表記である。

また、龍門本には、チク2字種2例（逐竹）、ヂク2字種3例（軸軸軸）、イク1字種1例（郁）に対して、次のようなチュク・ユクという音形が見られることが注目される。

- ・蓄チュク〔龍タ平・三一三1〕〔龍タ他・三一三5〕
- ・畜チュク〔龍ケ他・三四五4〕
- ・育ユク〔龍ヤ他・三四〇7〕

6 おわりに

本稿では、「色葉字平他」類の韻書においては、①数の上では漢音が優勢であるものの、呉音の付音例も多く、特に大東急本よりも龍門本に顕著であること、②少数ながら唐音も見えること、③中古音と対応しない音形が数多く認められ、そのなかには現代の「慣用音」に連なるものもあることを指摘し、このような付音の多くは、当時の流通漢字音の反映によるものと考えた。その他に、音韻上の問題として、④オ段長音の開合は概ね区別されているものの龍門本に混乱例が若干認められること、⑤四つ仮名の区別は大東急本において混乱が著しいこと、⑥オ段拗長音とウ段拗長音の動揺が龍門本に著しいことを指摘した。

当該資料に反映された字音が、当時の流通漢字音をどの程度反映しているのかという問題を、より実証的に明らかにするためには、更に他の資料群との比較を要する。例えば『平他字類抄』をはじめとする先行書と比較し、その変容部分に着目することで、当代性が浮き彫りになるであろう。また一方で、より日常性が高いと考えられる、『日葡辞書』『落葉集』等に見られる字音との間に、どれほどの距離があるのかについても、見定めてゆく必要がある。

また、なぜ『色葉字平他』類の韻書が流通漢字音を反映するのかという問いに対しては、答えを用意できていない。そもそも和漢・漢和聯句は当時どのように読まれたのかといった言語生活史の方面からの考察を要するが、全て今後の課題としたい。

²³ 「軟」に「ナン・シク」とある〔龍ス他・三七九4〕。和訓は【スウ】であり、『平他字類抄』辞字部・ス他の「軟（シク）」の誤りと考えられるが、この字は覚韻であり、字音はサクが期待される。

使用テキスト

龍門文庫本：『龍門文庫善本叢刊 第3巻』（勉誠社，1985）『古辞書研究資料叢刊 3』（大空社，1995）
大東急記念文庫本：『大東急記念文庫善本叢刊 中古中世篇 第14巻』（汲古書院，2016）
伊露葩字：国文学研究資料館新日本古典籍総合データベース公開画像（<https://kotenseki.nijl.ac.jp/bibliography/100010039/viewer/1>），2022年2月22日最終閲覧。
平他字類抄（京大本）：京都大学貴重資料デジタルアーカイブ公開画像（<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00013249>），2022年2月22日最終閲覧。
落葉集：小島幸枝編『耶蘇会板落葉集総索引 字訓索引・字音索引』（笠間書院，1978）
日葡辞書：土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』（岩波書店，1980）
倭読要領：『勉誠社文庫 66』（勉誠社，1979）

参考文献

有坂秀世（1941）「帽子」等の仮名遣いについて『文学』9巻7号（有坂秀世（1944）『国語音韻史の研究』明世堂書店，pp.255-274 に拠った）
石山裕慈（2018）「漢字音の一元化」の歴史『国語と国文学』95巻10号，pp.50-65
出雲朝子（1963）「室町時代における「寮」の字音について」『国語学』54集，pp.20-29
岡田希雄（1938）「色葉平仄辞書色葉文字に就いて」『書誌学』11巻4号，pp.9-14
岡田希雄（1941）「色葉平仄辞書色葉集に就いて」『書誌学』17巻2号，pp.16-18
岡本勲（1972）「日本漢字音に於る合拗音直音表記の一断面」『中京大学文学部紀要』6巻2号，pp.1-14
川瀬一馬（1986）『増訂 古辞書の研究』雄松堂出版
木村晟（1998）「『色葉集』（平仄）の本文対照一覧稿」『椋伽林学報』1号
木村晟（1999a）『色葉集』（平仄）の本文系統と基本語彙（4）『駒沢大学文学部研究紀要』57号，pp.1-124
木村晟（1999b）『色葉集』（平仄）の本文系統と基本語彙（5）—禅林辞書『色葉集』の成立過程について『駒沢大学仏教文学研究』2号，pp.39-97
木村晟（2001）『色葉集』類本文対照一覧〔続〕『學術典籍研究第四輯 大友信一博士古稀記念論集 椋伽林学報』椋伽林，pp.589-689
木村晟（2002）『中世辞書の基礎的研究』汲古書院
小松英雄（1956）「日本字音における唇内入声韻尾の促音化と舌内入声音への合流過程—中世博士家訓点資料からの跡付け—」『国語学』第25輯，pp.67-79
こまつひでお（1970）「不濁点」『国語学』第80集，pp.1-29
迫野虔徳（1975）「オ・ウ段拗長音表記の動揺」『国語国文』44巻3号，pp.29-43
高松政雄（1970）「オ段拗長音の一問題」『国語学』第83集，pp.22-31

高松政雄（1982）『日本漢字音の研究』風間書房

沼本克明（1972）「「厚」の開合について」『国語国文』41 巻 1 号，pp.25-38

沼本克明（1973）「変体漢文訓読に於ける字音語の性格」『信州大学人文科学論集』7 号，pp.31-43

福島邦道（1969）「「見ゅう」と「見よう」の交替」『佐伯博士古稀記念国語学論集』表現社，pp.533-551

松井利彦（1971）「近世漢学における漢字音の位相」『国語国文』40 巻 5 号，pp.1-33

屋名池誠（2005）「現代日本語の字音読み取りの機構を論じ「漢字音の一元化」に及ぶ」『築島裕博士傘寿記念国語学論集』汲古書院，pp.670-692

山田忠雄「歴史的仮名遣い」『新明解国語辞典 第七版』（三省堂，2012）附録

湯沢賢幸（1977）「室町時代における清濁と呉音・漢音—文明本節用集を中心として—」『国語国文』46 巻 2 号，pp.43-60

謝辞・付記

データベースの作成にあたっては、同研究室の康凱欣氏の協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

なお本稿は、日本学術振興会特別研究員奨励費（研究課題 21J20167「中近世における漢語の語形に関する研究—漢字音の一元化を中心に—」）の助成を受けたものです。

（おおしま ひでゆき 大学院人文社会系研究科 博士課程一年・日本学術振興会特別研究員）